

田植え1回で2回収穫！ 温暖化で注目「再生二期作」 通常と比べ3倍近い収穫量、輸出や業務用を低コストで生産

2021.11.1



1回目の収穫後の稲の株。収穫量を比較するため、左の刈り株は長めに残している＝2018年8月、福岡県筑後市（農研機構提供）

1回の田植えで2度収穫。稲刈りの後、残った株から伸びた稲を再び刈り取る「再生二期作」に注目が集まっている。地球温暖化が進めば、稲作が可能な期間は長くなる。農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）は実験で、通常と比べ3倍近い収穫量を実現した。輸出や業務用を低コストで生産する手法として期待が高まる。

稲は収穫後、刈り株から再び芽が出る。この芽を育てれば2度目の収穫ができるが、田植えから最後の稲刈りまで暖かい気温が続くことが必要。現在、国内で取り組む農家はほとんどいない。

温暖化が深刻になると、コメの収量が落ちるとの予測があり、高温に強い品種開発は各産地で進む。農研機構九州沖縄農業研究センターの中野洋博士は「われわれの研究は高温を利用するという逆の発想だ。温暖化が進めば、再生二期作に適した環境は広がっていく」と話す。

まず、普及が期待される地域は、気候が温暖な九州。中野氏らは福岡県筑後市の拠点で2017～18年、再生二期作でどれだけ収量を増やせるかを調べた。コメが多く実る独自開発の稲を4月中旬に植えて8月に収穫し、肥料を与えて11月に再び刈り取った。

2回の合計で10アール当たり1400キロ超を収穫した。通常の稲作は500キロ程度のため、3倍近い量だ。稲を十分に成熟させ、地面から50センチと長めに刈り株を残すと収穫が特に増える結果になった。ただ、この実験で使った稲では2回の収穫とも一般の品種に比べ味が劣り、改良の余地があるという。

沖縄県農業研究センターも昨年、生産の省力化で農家の負担を軽減することを目指して試験を開始。最適な品種の選定などを進めている。

国産米の輸出を手掛ける「W a k k a J a p a n」（札幌市）は海外での販売を目指す。関連の農業生産法人が今年、愛知県春日井市で試験栽培を始めた。

「海外で今求められるのはそこそこの価格で、そこそこの品質のコメ」と出口友洋社長。田植えの手間を省いて2回収穫できるため、生産コストを抑えることができると踏んだ。一方で「前例が乏しく、肥料の種類や量、与えるタイミングを見極めるのは難しい」と課題を挙げる。

国内ではコメ離れが進むが、世界的には人口増大で食料需給が逼迫するとの懸念がある。中野氏は「穀物の安定供給にも貢献できる技術だ。生産手法を確立したい」と話した。

©2017 The Sankei Shimbun & SANKEI DIGITAL